「平和への思いを届ける」

（匿名希望）78歳

私は昭和20年3月12日に、神戸市兵庫区で生まれました。生後5日目に、神戸市はB29爆撃機による大空襲をうけました。母は生まれたばかりの私をかたい座布団で支えて背負い、家の中の防空壕に入りなさいという近所の人たちの勧めもきかず走って逃げました。安全な所で私をおろすと、私の顔の皮は剥がれてずるずるだったので、この子はもう助からないと思ったそうです。

産後直ぐの身で逃げ回った母はもう疲労の極みに達しながらさまよい歩き、やっとのことで六甲の姉の家にたどり着きました。そばにいなかった父は3週間しても、私たちをみつけることができず、自分の家に掘った防空壕の中で亡くなった近所の人々と同じように死んでしまったと思ったそうです。

父は戦地でマラリアにかかり、内地に帰されました。その療養中に部隊が全滅したことを知り、自分だけが生きて帰ったことが申し訳ないとの思いから、終戦後も精神的な病を抱えることになり、時々発作がおきて現代の兵庫医大の精神科へ入退院を繰り返しました。

母は近所の人に隠れて、まるで遊園地に行くかのように父と子供たちを連れて病院に通いました。病院の精神科は鉄格子があってまるで刑務所のようだと、子供ながらに思いました。軍人恩給や生活保護も「生きて帰ってきたのだから申請するな」と言う父の考えで受けなかった為、我が家はいつも貧乏でした。部隊が全滅し自分だけが生きて帰ったことを何年たっても苦しんでいたのだと思います。

病気が落ち着いている時の父は戦争のことを一切口にしませんが、駅に手や足のない傷病兵がいると、いつも箱にお金をいれていました。

病気で元の大企業にはもどれず、小さな町工場で病と闘いながら働き、母は実家の家具工場の手伝いや仕立物などの内職で家計を支えていました。父の病が完治するまで 15 年かかりました。今、私がこの年まで元気で生きていられるのは、母が必死で私を守ってくれたおかげだと思っています。

「戦争は人と人の殺し合い、絶対戦争はしてはいけない」

と、よく母は言っていました。私は母の思いを次の代につなげたいと思っています。